

箱館ロシア病院の医師に関する知見補遺

松 木 明 知

一、はじめに

先きに筆者が、『北海道の医史』⁽¹⁾を執筆した際、その中で、幕末の箱館に来日した領事館付きのロシア人医師アルブレヒトの事績について言及した。

その後も来箱したロシア人医師について、ソビエトの医史研究者と連絡を取って鋭意研究を続けてきた結果、従来知られていなかった二、三の知見について知り得たので報告する。

一、アルブレヒトについて

安政五年（一八五八）徳川幕府は列国と通商条約を締結、それに基づいてロシア政府は、箱館に領事館を開設することに決定した。⁽²⁾

そして初代の領事としてゴシケビッチが安政五年来日した。

ゴシケビッチは一八三九年（天保十年）二十五歳の時、ロシアの清国派遣宣教使団の一員として北京に来て、一八五〇年

(嘉永三年)まで滞在した。この間、中国語、天文学、気象学を学び、さらに同僚の医師タタリーノフと共に昆虫や植物の採集に尽力したという。

彼は嘉永三年(一八五〇)、プチャーチン使節団として長崎、小笠原に來日し、翌翌年には箱館、大阪、下田などに寄港したが、その後、安政元年(一八五四)に下田で津波に遭遇したり、さらにクリミア戦争などのため、安政三年(一八五六)漸く母国の土を踏むことが出来たという。

ゴシケビッチが、日本の事情に詳しいため、初代領事に任命され、軍艦ジキット号に乗って箱館に入港したのは、安政五年九月であった。

ゴシケビッチについては、ソビエトの歴史学者フラインベルグ女史の『ロシアと日本』⁽⁴⁾⁽⁵⁾や、そのほかの文献に詳しいが、昆虫学上の業績に関連しては、長谷川仁氏⁽⁶⁾⁽⁷⁾が研究報告している。

このゴシケビッチに追従して箱館に來たのが、フラインベルグ⁽³⁾によれば、書記官V・D・オバンデル、海軍士官H・H・ナジモフ、医師長M・H・アルブレヒト、司祭長B・E・モハフ、補祭イワン・マホフなどであるという。

この中の医師長アルブレヒトについては、彼が箱館で書き、ペテルブルグの医学雑誌に投稿した「箱館の医学地誌」⁽¹⁾を筆者は紹介したが、その略歴については殆ど知られるところがなかった。長谷川仁氏は、長く中国に滞在したことがあるドイツの医師で植物学者ブレットシュナイダーの記述⁽⁸⁾からアルブレヒトについて略述している。それによると、アルブレヒトは一八二一年にエストニアの生れで一八四三年から一八四九年までドルパトで医学を学んだ。その後海軍軍医として勤務したが、このことが領事館付きの医師としてゴシケビッチと一緒に來日した理由であろう。

ゴシケビッチの影響によるものか否か不明であるが植物、貝、昆虫を採集して本国に送った。植物はマクシモウイチによって四種が新種として記載されたが、ムラサキオツツジはアルブレヒトに献名されたという。

長谷川氏⁽⁶⁾は、アルブレヒトは一八六〇年(万延元年)に帰国したと記しているが、谷沢、島田両氏⁽⁹⁾は、第八十六回日本

医史学会で、アルブレヒトの帰国は文久三年（一八六三）五月であると左の文書を発掘紹介している。

私共（深瀬洋春、永井玄栄―松木注）去来年（安政六年）己来願之通、魯医伝習被仰付、日々執行四能在候処、同人儀も当月（五月―松木注）上旬帰国致し候に付、其後は質疑問難、可良師も無御座、大に困迫罷在候処、
以下略

前述したドイツの植物学者ブレットシュナイダーは彼が一八六五年露都ペテルブルグでアルブレヒトに会い、その後数年後に彼が死亡したと述べていることから、長谷川氏は、アルブレヒトが一八七〇年前後に死亡したとしている。

しかし筆者は、ソヴィエト唯一の医学史博物館であるポール・ストラディナー医史学史博物館のカール・アロン館長の御好意により、一八七二年の医師の名簿の一部を入手した。

この「ロシア医学人名年報 内務省 医学部門編」(Rossijskij medicinskij spisok na 1872 S. Petersburg)と題する名簿の第五頁には、「アルブレヒト、ミハイロフ ペトロフ 極東地方、HC、MM」とあり、アロン館長は、このアルブレヒトが箱館に來たアルブレヒトと同一人物であろうとしている。そうとすれば一八七二年当時未だ生存していたことになる。現在のところ、右以外に彼に関する新資料がないが鋭意検索中である。

二、ゼレンスキーについて

アルブレヒトの次に領事館付の医師としてロシアから來日したのはゼレンスキーであると諸書に記されている。元木はゴシケビッチと一緒に來日したとしているが、一緒に來日したのは前述したようにアルブレヒトであるから元木の記述は誤りであろう。

前に掲げた島田、谷沢氏の紹介した文書には、「今般尚又魯国海軍医ザレスキーと申すもの、暫時当所に在留致し候由

伝聞仕候」とあり、これはゴシケビッチと一緒に来たことを否定する証拠でもある。この「ザレスキー」を島田、谷沢は「ゼレンスキー」のことであると注している。

長谷川氏も⁽⁶⁾レンセン教授の説に従って「ゼレンスキー」としており、筆者も拙著の中でゼレンスキーと記した。これは函館ハリストス教会の厨川師から「ゼレンスキー」であると直接伺ったためであった。元木は⁽⁴⁾「ゼレンスケ」とし、また函館の医学に詳しい阿部博士は⁽¹²⁾「ゼレンスケ」とも「ゼレンスキー」とも記している。

しかし当時箱館にいた新島襄は「ザレスチー」と記録している。⁽¹³⁾

このように彼の名はこれまで統一されたものではなく、様々な名前で呼ばれていたことが分る。

しかし著者は「ゼレンスキー」として種々調査したが、この綴りではこれまで全く手懸りが得られなかった。このことは、あるいは「ゼレンスキー」という呼称が誤っているのではないかということ強く示唆するものである。

そこで改めて⁽¹⁴⁾フラインベルグ女史の原著書を調べてみると「*Zelenski*」が正しく記されているのが分った。

従って従来「ゼレスキー」と称されて来たのは誤りであり、「ザレスキー」が正しい呼称であると思われる。

前掲の文書にも「魯国海軍医ザレスキーと申すもの」とあるが、発音通りに正しく記載されたものであり、新島も⁽¹³⁾ほぼ正確に記載していることが理解される。

もっともポール・ストラディンのアロン館長の御教示によれば、「ゼレンスキー」と発音される医師もいない訳でなく、前述した一八七二年の医師人名録には *Zelenski* または *Zelinski* という綴りの医師は四名おり、この中で *Zelenski* *Dmitrij* *Pavlovic* (一八三〇年生、一八五三年学位取得) と *Zelenski* *Michail* *Samolovic* (一八二九年生、一八五二年学位取得) の二人が、年代的には該当するが、兩名共ロシア国内の勤務ばかりで、海外に出たことはないという。

四、おわりに

ソビエト側の資料に基づくと、一八七〇年には死亡したと考えられていた、箱館領事館付の医師アルブレヒトは一八七二年頃には未だ生存していたことが判明した。

彼の後任として来日した医師は、従来「ゼレンスキー」「ゼレンスケ」「ザレスキ」「ザレスケ」など色々の名称で呼ばれていたが、ソビエトの歴史学者ファインベルグの原書には「ザレスキー」とあるのでこの名称が正しいものと思われる。ザレスキーについての詳細については現在鋭意調査中であり、改めて報告したい。

稿を終るに際し、種々御教示を賜わったポール・ストラディン医学史博物館 カール・アロン館長および農業環境技術研究所の長谷川仁氏、北海道大学図書館の秋月俊幸氏、元函館市ハリストス正教会の厨川勇師に深く感謝の意を表す。

- (1) 松木明知『北海道の医史』津軽書房 昭和四十八年 一三頁
- (2) 外務省編『日露交渉史』明治百年史叢書 第九十八巻 原書房 昭和五十四年 六十七頁
- (3) ファインベルグ(小川政邦訳)『ロシアと日本、その交流の歴史』新時代社 一九八一年
- (4) 元木省吾『北方渡来』時事通信社 昭和三十七年 六十八頁
- (5) 中村新太郎『日本人とロシア人物語日露人物往来史』大月書店 一九七八年
- (6) 長谷川仁『ゴシケビッチとアルブレヒト』自然 三一巻 十八頁 一九七六年
- (7) 長谷川仁『江崎悌三著作集』第一巻 解題 思索社 一九八四年 三四一頁
- (8) 文献6 十八頁 および長谷川氏よりの私信による。
- (9) 島田保久、谷沢尚一「一八五八〜一八六八年 箱館ロシア病院の医療活動をめぐって」日本医史学雑誌 三十一巻 二号および資料 昭和六十年
- (10) Rossijskij medizinskij spisok na 1872 S. Petersburg
- (11) Lensen G.A.: Report from Hokkaido: The remains of Russian culture in merthern Japan. Hakodate 1954 p 45
- (12) 阿部たしを『函館雑記帳』無風常社 昭和二十九年 九五五〜二〇七頁
- (13) 馬場 脩『函館外人墓地』図書裡会 昭和五十年 二十四頁

- (4) Fainberg E.N. I.A. Goshkevich: The first Russian "Historical-philological investigations", A collection of scientific papers, devoted to Academician N.I. Convadi's 75 anniversary of birth Moscow, Nauka, 1967, p 508 (原註文)

New Information on Russian Physicians to the Russian Consul General in Hakodate

by

Akitomo MATSUKI

New information on Russian physicians to the Russian Consul General in Hakodate at the end of the Edo era was introduced.

The information mostly concerned Dr. Albrecht and Dr. Zaresskii, who came to Hakodate in the end of the Edo era as physicians to the Russian Consulate.

The details included were not previously known to us.